# シェイクスピア落語
## 三遊亭圓窓『江戸の商人　胸の肉』を巡って

佐々木　隆

### プロローグ

筆者はこれまで「落語とシェイクスピア」（二〇一八）や「口演としてのシェイクスピア―日本のシェイクスピアの現状を考える」（二〇一九）等でシェイクスピア落語について考察を行ってきた。(一)すでにシェイクスピア落語は定着したものの、いわゆる高座本がないため、研究と結びつきにくい面がある。本稿では高座本、三遊亭圓窓『江戸の商人　胸の肉』(圓窓高座本題五十三号、二〇一八、第二十七推敲改訂）を基に考察を加えたい。(二)

### 一　シェイクスピア落語の流れ

これまでの調査において口演されたシェイクスピア落語の記録を整理すると次の通りである。

笑福亭松之助『じゃじゃ馬ならし』（第三十二回上方落語をきく会、大阪・大淀ＡＢＣホール、一九六六年十月十四日）

三遊亭圓窓『江戸の商人　胸の肉』（『ヴェニスの商人』の翻案』（第一五九回圓窓五百噺を聴く会、名古屋・含笑寺、一九九九年九月十日）

古今亭志ん輔『紅屋の商い』（『ヴェニスの商人』の翻案）（シェイクスピアを楽しむ会、東京グローブ座、一九九九年九月十八、十九日）

古今亭志ん輔『小言幸兵衛の夢想』（『ロミオとジュリエット』の翻案）（東京グローブ座、

二〇〇〇年九月九、十日）
古今亭志ん輔『花のお江戸の半次郎』（『ウィンザーの陽気な女房たち』の翻案）（東京グローブ座、二〇〇一年九月二十二、二十三日）
古今亭志ん輔『稲荷町の陽炎』（『夏の夜の夢』の翻案）（東京グローブ座、二〇〇二年七月十三日）
三遊亭圓窓『江戸の商人　胸の肉』（国立演芸場、二〇〇三年十二月十一日～二十日、十三日は大喜利休演）
古今亭志ん輔『稲荷町の陽炎』（『夏の夜の夢』の翻案）（赤坂区民センター、二〇〇四年三月五、六日）
古今亭志ん輔『丁稚』（『オセロー』の翻案）（麻布区民センター、二〇〇五年二月二十五、二十六日）
古今亭志ん輔『黒白粉』（『ハムレット』の翻案）（赤坂区民センター、二〇〇六年二月二十四、二十五日
古今亭志ん輔『針千本』（『リチャード三世』の翻案）（赤坂区民センター、二〇〇七年三月十、十一日）
古今亭志ん輔『冥利のゆくえ』（『ジュリアス・シーザー』の翻案）（赤坂区民センター、二〇〇八年三月二十二、二十三日）
古今亭志ん輔『寿大尽』（『リア王』の翻案）（赤坂区民ホール、二〇〇九年三月二十一日）
古今亭志ん輔『小豆の仇討』（『マクベス』の翻案）（赤坂区民センター、二〇一〇年三月十三日）
古今亭志ん輔『恋は異なもの味なもの』（『夏の夜の夢』の翻案）（赤坂区民ホール、二〇一一年七月二日）
下町ダニー・ローズ公演「演劇らくご『ヴェニ

スの商人？』～火焔太鼓の真実～」（池袋・シアターグリーン、二〇一一年九月一～七日）

古今亭志ん輔『お伊勢参り』（『終わりよければすべてよし』の翻案）（赤坂区民ホール二〇一二年三月二十日）

下町ダニー・ローズ公演「演劇らくご『談志のおもちゃ箱』～ヴェニスの商人？黄金餅後日談」（新宿・シアターモール、二〇一二年五月三十日～六月十二日）

古今亭志ん輔『婿入り天狗』（『テンペスト』の翻案）（赤坂区民ホール、二〇一三年三月二十日）

古今亭志ん輔『八丁櫓』（『シンベリン』の翻案）（赤坂区民ホール、二〇一四年四月二十六日）

古今亭志ん輔『八丁櫓』（『シンベリン』の翻案）（池袋・あうるすぽっと、二〇一四年九月二十三日）

古今亭志ん輔『冥利のゆくえ』（『ジュリアス・シーザー』の翻案）（赤坂区民センター、二〇一五年四月二十六日）（調査継続中）

三遊亭圓窓『江戸の商人　胸の肉』はシリーズ化された古今亭志ん輔のシェイクスピアを楽しむ会（シェイクスピア寄席）以前に口演されていることに大きな意味がある。

## 二　三遊亭圓窓『江戸の商人　胸の肉』

### （一）『胸の肉』というタイトル

日本の『ヴェニスの商人』初期の受容状況時系列に簡単に紹介すると次の通りとなる。

一八七二年　五月　*The Nagasaki Express* (Vol.111 No.121)
※日本で初めて『ヴェニスの商人』が紹介される。ただし、英文。(三)
一八七七年十二月　「胸肉の奇訟」（『民間雑誌』第九十八号、第九十九号）
※ラム『シェイクスピア物語』より翻案訳。
一八八五年　四月　宇田川文海「何桜彼桜銭世中」（『大阪朝日新聞』十日～五月二十日）
一八八五年　五月　宇田川文海翻案・勝諺蔵脚色『何桜彼桜銭世中』（中村宗十郎一座、大阪戎座）
一八八五年　十月　巌本善治訳「人肉質入裁判」（『文学叢誌』～十一月）

日本人が初めてシェイクスピア劇を上演したのは一八八五年五月の『何桜彼桜銭世中』（『ヴェニスの商人』の翻案であった。以降、『人肉裁判』、『人肉質入裁判』『銭の世の中』『ベニスの法廷』『マーチャント・オブ・ベニス』の演目名で上演された。『ヴェニスの商人』では法廷の場面は象徴的な場面である。上演では一八八五年に登場しているが、それ以前、一八七七年の『民間雑誌』（第九十八号、第九十九号）では「胸肉の奇訟」として『ヴェニスの商人』が紹介された。受容初期では「銭」と「裁判」がキーワードとなっていることがわかる。中でも「人肉裁判」「人肉質入裁判」は特徴的だ。一九〇七年七月には富樫蟠伸『ベニスの商人　擔保の肉』（日高有隣堂）なども象徴的だ。圓窓は設定を江戸時代にしたため、「江戸の商人　胸の肉」というタイトルにしたのであろう。また、胸の肉ということから、アントーニオ役の安藤似蔵が医者として登場するのである。

## （二）登場人物設定

『ヴェニスの商人』の法廷の場面で外せない登場人物は以下の通りとなろう。

シャイロック　ユダヤ人の金貸し

アントーニオ　ヴェニスの商人、シャイロックから借金する

ポーシャ　ベルモントで莫大な遺産を相続した聡明な女性、変装して法学博士。バッサーニオと結婚する。

バッサーニオ　アントーニオの友人、ポーシャと結婚する。

被告、原告、裁判官・弁護人として法廷の場面だけを見るのであれば、シャイロック、アントーニオ、ポーシャの三人でも成立する。シェイクスピア『ヴェニスの商人』と三遊亭圓窓『江戸の商人　胸の肉』の対応関係を見ておきたい。

| 『ヴェニスの商人』 | 『江戸の商人　胸の肉』 |
|---|---|
| シャイロック | 清六 |
| アントーニオ | 安藤似蔵 |
| ポーシャ | お藤（話でのみ登場） |
| バッサーニオ | 登場しない |

筆者は「シェイクスピア落語の可能性」（二〇一九）においても登場人物対応についてはすでに分析を行った。(四)圓窓の安藤似蔵は商人ではなく、演目名が「胸の肉」ということから、医者の設定になっている。また、ポーシャやバッサーニオに当たる登場人物は登場しないが、裁き手として南町奉行・大岡越前が登場している。シャイロックの大家として志兵衛が登場している。これにより

店子のトラブルを抱える大家、店子と揉め事を起こしている人物、訴えを取り上げた南町奉行所の大岡越前という構図が出来上がっている。

### (三) オチまでのプロセス

落語では「オチ」（落ち）が重要な鍵を握ることになる。従って、全体の流れとオチの関係も注目する必要があるため、内容を時系列に沿って簡単に紹介しておきたい。

三月二十一日の夜、清六が詰将棋をしていると、安藤という医者が五両を貸して欲しいと尋ねて来た。理由は結婚相手のお藤のかかっている不治の病を治すために高価な薬を買うためだった。（お藤と不治の病とここで洒落）清六は足りないといけなので十両を貸すと言い、利子はないが七月八日までに元金を返せばよいと申し出た。安藤は返せないかもしれない、特にこれといったカタはないと話すと、清六は胸の肉、五百匁をいただくことにしましょうと言い、安藤もこれに同意し、証文を交わし、血判を押し、清六が十両を差しだした。

七月八日を迎えると、安藤が清六を訪ねた。清六はひとりで将棋を指していた。借りたお金でよい薬が手に入り、お藤は快方に向かっていることを伝えた。しかし、安藤は十両を期限である今日は返せず、来月には何とかしたいと申し出た。

清六は将棋好きから、安藤に将棋を誘い、安藤はしぶしぶながら将棋に付き合うことになったが、ふたりは夢中になった、。話は詰将棋のこととなり、安藤は「この金はきついですね」(五)と吐露する。将棋の金（きん）と借りている金（かね）とここも洒落となっている。時間はいつの間にか期限の八日を過ぎてしまった。清六は十両が返せ

ない以上、証文通り胸の肉五百匁を求めたが、安藤と言い合いになり、そこへあまりの騒ぎに大家の志兵衛が清六のところを訪ねた。大家は事の次第を聞き、清六が証文通りにするということに違和感を覚えたが、その時清六が医者・安藤への恨みを持っていることが分かった。清六の病気の女房を診てもらうため、何度も安藤の家を訪ねたが留守で、挙句の果てに、安藤はお藤とお出かけ、泥酔していた。清六が家に帰ると、痛さに耐えかねて乳の下（胸）に包丁を突いて息絶えていたという。清六は医者が女房を殺した同然と主張し、大家はそれをなだめようとしたが、埒が明かず、清六は南町奉行所の大岡越前守に訴え出た。

南町奉行所での白洲では奉行の大岡越前守が清六と安藤の言い分を聞き、清六の申し立てが正当であることを認めたが、慈悲をかけてはどうかとの提案もするも、清六は証文通りにしたいと主張する。奉行も清六に同情しつつも、期限切れになるように仕組んだ詰め将棋についても調べてみた。そこで奉行と清六の詰め将棋が始まり、奉行が見事に詰めた。

奉行　・・・この奉行所の白洲は恨みを持って、肉を捌く所ではないことを。

清六　はいッ。情けを持って、人を裁くところでございました。（六）

ここでは「捌く」と「裁く」をかけていることはもちろん、「肉」は「憎」しみをも連想させる。当初はこの「捌く」と「裁く」をオチにしていたようだ。（七）最終的には「詰み（罪）を裁いたのじゃ」（八）となっている。これは当然将棋が設定上、大きな意味を持っていること、慈悲をかけると言う点を生かしたものだ。

## エピローグ

『江戸の商人　胸の肉』は『ヴェニスの商人』を落語の形式にシェイクスピア作品を当てはめた「落語版シェイクスピア」(九)という分類になる。明治期にシェイクスピア作品の中で翻案されて受容が早かったのは『ヴェニスの商人』である。そのおもな理由は二つある。第一は金銭の貸借に関わる内容で東洋も西洋もなくわかりやすいこと、第二に日本には判官びいき、裁判（白洲）では大岡裁きが知られており、この二つの要素が『ヴェニスの商人』の人肉裁判の下りでは共通するものがあるからだろう。『江戸の商人　胸の肉』では、さらに将棋（詰め将棋）、長屋、大岡裁判等、落語でよく取り上げられる題材や内容が盛り込まれている。『ヴェニスの商人』の内容だけでなく、さらに、清六の女房にまつわる安藤との因縁、清六の女房が痛みに耐えかねた旨に刃物を射して自害したことなど、落語「胸の肉」に込められたものははるかに多いのである。

## 注

（一）「落語とシェイクスピア」（『むらおさ』第二十六号、二〇一八年七月）、「口演としてのシェイクスピア―日本のシェイクスピアの現状を考える」（日本英語文化学会の記念論文集に応募し、二〇一九年七月五日に査読審査を通過し、現在出版準備中）、「シェイクスピア落語の可能性」（『日本英語文化学会会報』（第十号、日本英語文化学会、二〇一九年十一月）

（二）二〇一八年八月以降の調査で落語・三遊亭

圓窓『江戸の商人　胸の肉』の存在がわかり、その後、二〇一八年九月七日に三遊亭圓窓氏に問い合わせをしたところ、後日、高座本をご送付戴いた。誌面を借りて感謝申し上げたい。メールの問い合わせ内容については同高座本の五十八頁に記載されている。

(三) 拙著「埋もれていた *The Nagasaki Express* のシェイクスピア」（『日欧比較研究』第十六号、日欧比較文化研究会、二〇一二年十月）で詳細に論じた。

(四) 拙著「シェイクスピア落語の可能性」、十五頁。

(五) 三遊亭圓窓『江戸の商人　胸の肉』（高座本、三遊亭圓窓、二〇一八年九月）、十一頁。

(六) 同右、三十三頁。

(七) 同右、五十六頁。

(八) 同右、三十四頁。

(九) 佐々木隆「落語とシェイクスピア」、十八頁。

※ *The Merchant of Venice* の日本名については数種類ある。筆者はここでは『ヴェニスの商人』を採用しているが、引用等関係から『ベニスの商人』等の表現もあり、表現が複数混在していることをお断りしておきたい。